平成 21 年 5 月 16 日作成

# ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く　（第 43 号）
# 鵜戸の浜と鵜戸神宮　（その 3）

吉　田　六　雄

## 日南海岸

青島神社から鵜戸神宮へは「日南フェニックスロード」と名付けられた、国道 220 号線を南下する。その頃の時間は、午後の 2 時過ぎである。そして灼熱の南の太陽が、鵜戸神宮へと招いているかの様である。青島より 17ｋｍほどは走行したであろうか。今まで左手側に「ギラギラ」光る日南海岸。その遠方は日向灘、太平洋へと広がる。時折、右手に小さな民家群を目にして走行して来たが、突然に鵜戸山のトンネルに突入した。2 分ぐらい走ったろうか。トンネルの出口左側に「鵜戸神宮」の大きな観光案内板を目にした。そしてこの鵜戸神宮の地にやっと辿り着いた思いであった。それは私にとって、「ホツマツタヱ」文献を手にした時より疑問を解決する地でもあった。その疑問は『神武天皇の父である「カモヒト」の「ナギサ　タケウガヤ　フキアワセズ」の御祖天君が、滋賀県の多賀（大社）の地より「何故にこんな遠方の地に、何故に上陸したのか」であった。

## カモヒト天君と鵜戸の浜

そのカモヒト天君の鵜戸の浜入りは､ホツマツタヱ文献の 27-81～83 文に記載されている。「時は神武天皇（タケヒト）が幼少の五歳のことである。この時は「スス暦」の御世であるが、あえてアスス暦に換算すると、アスス 11 年のことである。カモヒト天君は大亀船で近江（滋賀県）のタガ（多賀）宮を出発されて、アワウミ（琵琶湖）に出て、そこから淀川を下り、播磨灘の室津（兵庫県たつの市御津町室津にあり、播磨灘に突き出た天然の良港）より、瀬戸内海を通過して、安芸、宇佐、速吸門を通過して、日向灘の鵜戸の浜に着かれたとのことである。

故松本先生は「月刊ホツマ 113 号」の中で、「ウドの浜はいまの宮崎県日向市の風光明媚な鵜戸海岸のことで、ここにある鵜戸神宮は、いまも神代ながらの御縁のウガヤ（カモヒト）天君を祭っている。これはホツマの伝承の正しさを証明する。この神社がなぜウガヤを祭神とするかは、記紀では全く浮かんでこない。・・（中略）・・ウドには「鵜戸」の漢字があてられ、この「鵜」は「ウガヤ」の「ウガ」と関係あるかのように云われているが、実はウは偉大なといふ意味であり、トは完全なといふことで、ウガヤ大君の上陸されたのを祝福してこの名が付けられたと思ふ。」と述べられている。ちなみに「ト」は、漢数字の「十」のことであり、「一、二、・・と数えて、十」で終わると云う、完全と訳せる。

その後鵜戸の浜に到着されたカモヒト天君は、鹿児島の高千穂峰の山麓にあった「鹿児島宮」に行かれて、筑紫を治める県主三十二神に会われた。そしてカモヒト天君は、「（25-18～19 文）昔、ニニキネ天君が、筑紫を広く巡り、御狩（地方巡視）されながら、井堰や堤を作って、新しく田を作られた」例に倣い、県主三十二神のご要望（御狩）をお聞きになり、井堰や堤や新田を見て周り、壊れた所を直し、絶えた所を継ぎ足された。これにより筑紫が良く治まった。この御幸の成せる業も別雷の神（ニニキネ）が遺された功績によるところが大きい。」とホツマツタヱは記載している。

27-81～83 文

皇子タケヒトは
歳五つ　・・・・・
（中略）

天君は　　筑紫に御幸
室津より　　大亀船に召して
鵜戸の浜　　鹿児島宮に
三十二神　　御狩お乞えば
巡り見て　　廃るお直し
絶えお足し　皆治まるも
別雷の　　神の功
残りあり

## 鵜戸神宮

鵜戸神宮の駐車場は、トンネルを抜けた左側にあった。駐車場の大きさは車の駐車スペースにして、約 300 台は止められるであろうか。そして駐車場の東側に、鵜戸山八丁坂があり、ここの一角に「鵜戸神宮」と刻まれた大きな石碑があった。ここから八丁坂参道になる。この石碑の横を抜けると八丁坂の参道は登り坂になり、その後、道なりに左側に曲がる。そして鵜戸崎隧道の歩行者用のトンネルに入って行く。そのトンネルを抜けると、八丁坂は長目の下り道になる。しばらく歩くと、やっと左手に鵜戸神宮の社務所を見つけた。そしてその前は広場の様な大きな道があり、目の前にはブル一色の太平洋が広がっていた。

そして左手方向に、幅広い参道が現れた。その参道を進んで行くと、右手に「鵜戸神宮境内図」を目にする。この鵜戸神宮境内図を見ていると、今までテレビ等で見る「鵜戸神宮」は、岩屋の中に造られた本殿の姿であったことに気づいた。巷では、「現地を見る」とは云う言葉があるが、東京・横浜で想像していた以上に「鵜戸神宮」の大きさは、なんと、広く大きく、海に突き出た半島のひと山、すべてが鵜戸神宮であった。そして参道と神宮の建物が、海岸沿いの断崖の上に造られたものだった。楽しい鵜戸神宮の参道

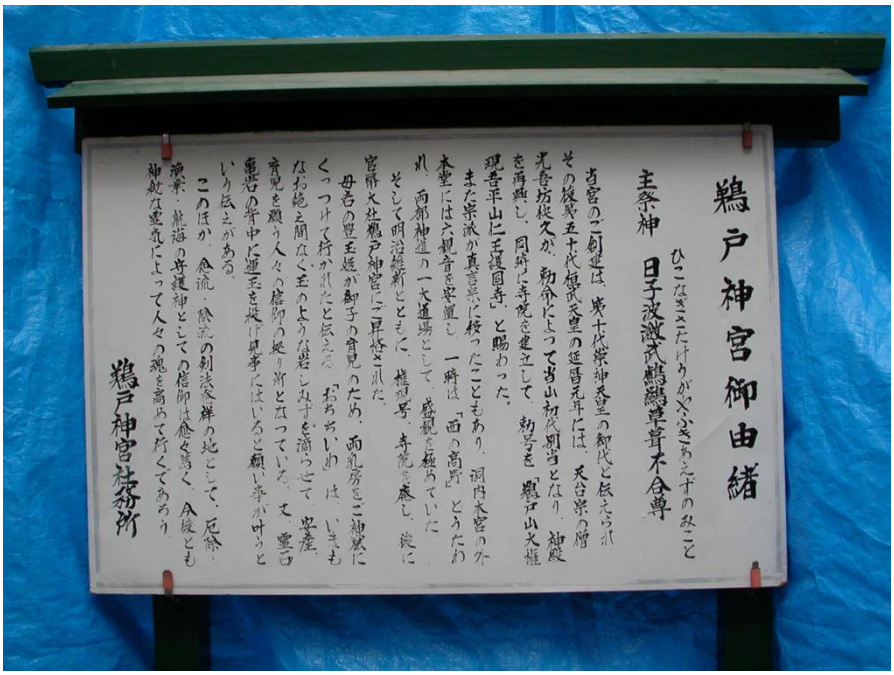
鵜戸神宮の参道は「楽しい」と表現したが、それは約 400～500mはあると思われる参道の道程とその間の風景の変化である。その参道の変化を社務所からの順で述べると、鵜戸神宮境内図、赤く塗られた神門、朱色の二階建ての楼門、「鵜戸神宮御由緒」の掲示立て札、「鵜戸神宮本殿の説明」立て札、千鳥橋、玉橋、約 100 段の階段そして岩屋内の本殿と続いていた。それにしても断崖の上の参道より見る、太平洋の彼方の小さく白い入道雲が湧き上がる風景。さすがに南九州の風景に満喫してしまった。

## 鵜戸神宮のご由緒

　朱色の二階建ての楼門を過ぎた所に、鵜戸神宮の御由緒の立て札があった。その立て札を読んで見ると、

## 鵜戸神宮御由緒

主祭神　日子波瀲　武ウガ草　葺不合尊　（ひこなぎさ　たけうがや　ふきあえずのみこと）
「当宮のご創建は、第十代崇神天皇の御世と伝えられ、その後第五十代桓武天皇の延暦元年には、天台宗の僧光喜坊快久が、勅命によって当山初代別当となり、神殿を再興し、同時に寺院を建立して、勅号を「鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺」と賜った。・・（中略）・・そして明治維新と共に、権現号、寺院を廃して鵜戸神社（注 1）となり、後に官幣大社鵜戸神宮に昇格された。・・（後略）・・。」と記載してあった。
　この立て札の主祭神こそが、「ホツマツタヱ」文献に記載されている神武天皇の父君である、「ナギサ　タケウガヤ　フキアワセズ」の天君であった。




（注 1）鵜戸神社
鵜戸山上陵内には「鵜戸六社権現」があったが、1871 年（明治 4 年）の災害により現在地に遷座し名称も鵜戸神社に改められている。（参考文献:ウィキペディア）

タケウガヤの命名の由緒
　またこの天君の名前の出白に興味を惹かれる。「ホツマツタヱ」文献の 26-14～15 文には
コヤネ神　　諱考えて
カモヒトと　　母よりナギサ
タケウガヤ　　フキアワセズの
名お賜ふ
　とあるが、その前後の文より、「鴨船に乗り福岡県志賀島より福井県敦賀の北津に向けて航行していた。島根県の沖合でのできごとであろうか。母である豊玉姫が乗った鴨船が、破損して渚に投げ出され、溺れそうになるが、母は猛き心で泳ぎ切り、龍や蛟の力得て（幸いにも波に乗り）、磯に着くことができた」とある。そしてその後の文に「ホホデミの君が、松原に涼みに来て、豊玉姫の産屋を覗けば」とあるところから、その時の「豊玉姫」は、「カモヒトを身籠もった身で、

鴨船が破損したため、渚に放りだされるが、猛き心で磯に泳ぎ切った」ことになる。現在流に云えば豊玉姫は、「母は強し」であった。この母の体験より名付けられた名こそ、「ナギサ　タケウガヤ　フキアワセズ」であった。それにしてもこれまでの天君には、こんな素晴らしい名は見あたらない。

## 岩屋内の本殿

玉橋より本殿に続く長い階段を降りて行くと、岩屋の本殿前に出る。岩屋の前には赤い鳥居があり、岩屋の奥に朱色の権現造りの拝殿があった。それにしても、豪華な彩色を施した飾りや建具には、目を見張ってしまった。そして拝殿奥の「カモヒト」にお参りした。その後拝殿の周囲を回ると岩屋の最も奥に、「産湯の跡」と書かれた立て札と小さな祠があった。詳しい説明はなかったが、「カモヒト」皇子の産湯の跡を表現していると感じたが、ここのところは「カモヒトの誕生」の記述であるが、前文の「タケウガヤの命名の由来」の記載とは大きく違う様だ。

「鵜戸神宮本殿」

## 竜宮伝説を連想させる亀岩

本殿にお参りして表に出ると、本殿前の断崖絶壁の上の広場に出る。ここから日向灘を望むと眼下に大小の岩々が目に入る。御船岩とご柱岩と呼ばれる岩である。その手前に、亀の甲羅形と首の形状がつながった形の岩があった。表面は滑らかで、鍾乳石で出来た様なツルツルの表面をしていた。この岩の名前は、亀岩桝形岩と名付けられていた。その隣の石群も丸みを帯びた石で、亀の一群と思えそうであった。私はこの「亀石」群を見て、サブ題の「おとぎ話　筑紫ウマシの浜は、竜宮城か」と思ってしまった。のちに、「日南海岸散歩　鵜戸神宮」のホームページを見ると、「太古の昔、初めてこの岬を見た人々がその奇観に畏怖し、神々の鎮座するところと思ったのも無理のないことのように思える」と表現していた。

## 南九州に遺された遺産

本殿にお参りの後、本殿脇の長い石段を登りながら、ご由緒の「第五十代桓武天皇（注 2）の延暦元年には、天台宗の僧光喜坊快久が、勅命によって当山初代別当となり、神殿を再興し、同時に寺院を建立して、勅号を「鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺」と賜った。」の一節を思い出していた。桓武天皇の御世は、歴史の年代で云えば、「平安時代」である。日本の文化が花開いた時でもある。この時代に、時として「天台宗の僧光喜坊快久」に勅命が下された。その甲斐があって、700 年、720 年に編纂された古事記や日本書紀にも記載がない「鵜戸神宮」を再興されて、現在、私は「ホツマツタヱゆかりの地を歩く」として取材することができる。それにしても「また何故に、カモヒト天君は鵜戸の浜に着かれたのか」と疑問を抱きながら、今夜の宿である「都井岬」へとスズキの「スィフト」を走らせた。

（注 2）桓武天皇
天応元年（781 年）4 月 15 日に即位され、①784 年、長岡京に遷都。②794 年に平安京に遷都。③坂上田村麻呂を征夷大将軍として東北征伐に派遣。最澄や空海が唐より帰国し④「密教」を広める。

## 都井岬へ

都井岬へは、鵜戸神宮から約 35Km の距離である。その間、国道 220 号線をそのまま南下して、油津（注 3）港を経て南郷で国道 220 号（西に行き、串間市中心部へ）と別れて、国道 448 号を更に南下すると都井岬の付け根の「串間市都井町」に着く。そして都井（注 4）よりしばらく走行すると、「駒止の門」があり、これより先が「都井岬」の日南海岸国定公園、都井岬の野生馬の牧場であった。

（注 3）油津の地名（私見）
油津港は入り江になった、天然の港であった。この日は大きなタンカーが数隻は停泊出来そうな波止場も閑散としていた。そんな中波止場に足を止めて、この油津の地名を考えて見た。現在は漢字で油津と筆記するが、本来は「吾平津」ではなかろうか。吾平津（アイラツ）と呼び、吾平の港ではなかったかと察した。それが何時しか訛って、「油津」と記載されたのではないだろうかと。

（注 4）都井（トイ）
「都井」について余談であるが、日本建築に使用されている「あまとい」について、辞書で調べると「雨樋」の漢字が記載されている。日本建築に使用されている形状は、軒の先端下に取り付けられており、形状は細長い半丸か､凹形である。このことを漢字で表現すると「おけ」の漢字の「桶」に似ている。ここの都井岬に辿り着くと、都井岬の形状は幅が約 2Km、長さが約 4Km の細長い形状をしている。日本建築に使用されている「天樋」の形の細長い形状をしている。このことから、日本語の「トイ」と漢字の「樋」は別物の意味であり、これを裏付けるように、辞書の「樋」を中国語（北京語）に翻訳すると、「導水管」と訳していた。

## 都井岬の馬

「ホツマツタヱ」文献には筑紫の馬のことが、南の馬として「19-B10～B12 文」に記載されている。この場面は「トヨケ」の子供の「オバシリ」が、馬乗りの業を「オオナムチ」の子供の「タカヒコネ」に、教えている個所である。そして「南の馬」の特徴を説明した個所でもある。この文の説明は「読みの通り」で、説明は不要であろう。

南の馬は
小さくて　年馴れ早く
根が薄く　功しならず
しかし又　強き弱きも
種により　毛色に分つ
良し悪しも　育ちによりて
品変る　よく乗り馴れて
これを知る

車で放牧場の道を山なりに登って行くと、午後4時の西陽になろうかとする頃、太陽の陽を浴びた「野生馬」の群れを発見した。更に車を進めると直ぐ近くの道路沿いに、5～6頭の馬が草を食べていた。馬の背丈は親馬でも、ホツマツタヱ文献に記載の通りに小さい。馬の丈は140～150cmくらいであろうか。そして都井岬グランドホテルの駐車場に馬が迎えてくれていた。馬の歓迎はその後も続き、車より荷物を降ろす間にも車の脇に静かに佇んでいる。特に私の奥さんは馬に好かれていた。それにしてもこの馬たちは良く人馴れしていて、「ホツマツタヱ」文献に記載の通りであり、驚かされた。そして8月10日の取材を終えた。

（おわり）